

『金谷宿おもしろ社寺ご利益めぐり』コース

①金谷駅をスタート

②金谷宿本陣跡 (①から徒歩 10分)



宿場 DATA

宿並：7町24間 (約806m)

宿全長：東西16町24間 (約1,787m)

宿内人口：4,271人 (天保14・1843)

施設：本陣3、脇本陣1、旅籠51



金谷宿には、山田屋、佐塚屋、柏屋の三軒の本陣と脇本陣、問屋場、助郷会所等がありました。

今はその面影も無く、佐塚書店前と地域交流センター前に「本陣跡」の立て札があるのみです。



天保十四年の金谷宿明細書によると、佐塚屋は「建坪二百六拾三坪、門構玄関附表間口拾三間、奥行三拾五間半」とあり、柏屋とならぶ大きな規模でした。現在、屋敷は分割されて当時の面影はありません。

③利生寺 (②から徒歩 5分)

利生寺の由来



泰然たる岩山の徳を表して「得岩山」と号し、観音様によるご利益(利生)があることから「利生寺」と名付けられているともいわれています。慶長10年(1605年)、甄州全察大和尚を迎え新たに禅宗となし、法灯を伝えて現住職・眞道大和尚に至っています。



ご本尊「地蔵菩薩」

このお地蔵様は、観音様とならび、人々の苦しみに救いの手を差し伸べてくださることから、ご本尊として「地蔵菩薩」をお祀りするようになったといわれています。



聖観世音菩薩尊坐像

利生寺の観音様は、天平 12 年(740 年)頃の高僧行基作と伝えられており、島田市の文化財にもなっています。言い伝えでは、観音さまが夢に現れて人々の願いを聞き、手助けして下さると言われています。夢で見るほどの強い願いを聞き届け、導いて下さることから「夢應(ゆめおい)観音」と呼ぶようになりました。

④洞善院 家康の側室、茶阿局のゆかりの寺 (③から徒歩 10 分)



当初真言宗でしたが、天正 15 (1587) 年天龍円鑑禅師哉翁宋咄大和尚を迎え、曹洞宗に改宗して開創されました。

慶安 2 (1649) 年、三代将軍家光より御朱印地高 10 石を下賜されています。

元禄 12 (1699) 年に現在地に移転。寛政 12 (1800) 年 12 月に火災ですべて全焼し、文化 2 (1805) 年に本堂・諸堂が再建されました。また、境内には本堂兼

山堂・位牌堂・万丈・庫裏・鐘楼・合祀堂(旧閣魔堂)・山門があります。

江戸時代は川留め等の際の大名等の休泊施設にもなりました。

家康の側室 茶阿局

堂内には、金谷出身の徳川家康の側室、茶阿局(ちゃあのかつね)の位牌があります。茶阿は徳川家康の六男 辰千代(後の松平上総介忠輝)の生母で、天和 7 (1621) 年に死去。金谷在住の頃、この寺の住職が書道の師匠をした縁から位牌が安置されています。戒名は「朝覚院殿貞誉宗慶大姉」。

静かに世を去る釈迦と嘆き悲しむ弟子や鳥や獣を描いた、丸尾月嶂作「釈迦涅槃図」

洞善院には、円山応挙の孫弟子にあたる郷土画人の丸尾月嶂が妻の死をきかっけに3年半の歳月をかけて描いた、280×240センチの大作「釈迦涅槃図」（常時観覧はできません。）があります。

「釈迦涅槃図」には、沙羅双樹の林で横たわり世を去る釈迦を囲み、多くの弟子達をはじめ鳥や獣までも嘆き悲しむ様子が描かれており、昭和45年2月14日に市指定文化財に指定されています。

⑤医王寺 永村茜山作、薬師堂の天井画が圧巻！ (④から徒歩7分)



空海(弘法大使)が諸国旅行の途中、この地に立ち寄った時、薬師如来の霊告を受け、自ら「薬師如来」を彫りし開眼、安置したのが「医王寺薬師堂」の開創(始まり)と云われています。

開創当時は「寺」はなく「堂守」で、後にこれが発展して「真言宗金谷山医王寺」となりました。また、戦国末期の豊臣時代(慶長元年：1596)に、

本尊(薬師如来)、山号、寺号を継承して「曹洞宗」に改宗、現在に至ります。また、江戸時代には幕府から“薬師堂永続”のための「御朱印」を授かりました。

現在の薬師堂は元禄5年(1692)に再建(過去2回火災で焼失)され、元禄15年(1702)向拝(正面の軒)が付け加えられ明治時代には柿葺(こけらぶき)を棧瓦(さんがわら)葺に変える等の改造を行いましたが、全体的には建立のままで保存されています。

医王寺薬師堂は、昭和60年10月5日、県指定文化財に指定されています。

※尚、平成28年1月より薬師堂の解体修理及び、薬師堂天井画の修復を行い、平成29年10月8日完成しました。



■永村茜山の天井画(県指定文化財)

医王寺の薬師堂には、江戸時代後期の蘭学者で南画家として著名な渡辺崋山の弟子の一人、永村茜山(ながむらせんざん)の天井画があります。茜山は文政3年(1820)江戸の生まれで、10歳の時から崋山に学び、「十哲」といわれる秀れた画人の一人です。

縁あって金谷宿の永村家に婿養子に入り、27歳

から40歳までの“油がのる”時期に金谷宿の組頭として繁忙を極める役職にあったため、他の同門の画人達に比べて作品も世間の喧伝も多くありません。

天井画は、薬師堂外陣天井の中央に、大作の「雲竜図」、左右4面に「天女図」があり、いずれも万延元年(1860) 菫山41歳の時の作、内陣天井の「花卉図」もその画致により菫山晩年の作と推定されています。

菫山の墓は、同市洞善院墓地に、また城山公園の一角には、明治32年5月、金谷の有志によって建てられた菫山顕彰碑があります。

医王寺薬師堂天井画は昭和58年2月25日県指定文化財に指定されています。

⑥八雲神社 例祭には夜店が並び、近所の人々で賑わう神社 (⑤から徒歩5分)



慶長八年(1603)以前は単に金谷宿といい、金谷宿下の産土神として素盞鳴尊を元河原町字松原上に奉斎し、牛頭天王(ごずてんのう)社と称しました。

その後水害にあい寛文元(1661)年六月十日宇大覚寺の南山に社殿を造営して遷座奉斎しました。



明治の廃仏毀釈・神仏分離令を契機に再び河原町の産土神として祀られることになり、大井川の川越人足衆によって大覚寺から現在地に遷座され現在に至っています。明治3(1870)年、神仏判然令に従って八雲神社に改称されました。

社殿には、川越人足が奉納した郷土の画人永村菫山の絵馬があります。例祭日：七月十五日前後の休日

⑦専求院 (⑥から徒歩1分)

専求院の由来

天正16年(1588年) 方誉西向上人阿弥陀堂の草庵をもうけ、慶長8年尊蓮社三譽上人が法性山専求院と改称されました。

当山は江戸時代3度の火災に遭うもその都度建立し、現在の本堂は慶応元年に建立したのですが、庫裏兼用の為現住祥誉が昭和50年大改修して現在に至っています。

市指定文化財 彫刻

木造五智如来坐像（もくぞうごちによらいざぞう）

室町時代後期 昭和 53 月 2 月 13 日指定 専求院 島田市金谷河原 2063-1



五智如来とは大日如来・薬師如来・宝生如来・阿弥陀如来・釈迦如来の五如来で、それぞれ如来の智を成就したものです。専求院の五智如来像は室町時代後期の作品とされ、五体とも完全に揃っている例は、この地域では珍しいものです。

⑧長光寺 (⑦から徒歩 20 分)

金谷駅の南側にある本遠山長光寺。



天保元(1644)年、慈善院日悦(にちぜつ)上人が身延山二十六世智見院日暹(にっせん)上人を開山に開いた日蓮宗の寺院です。天保十四年の「宿明細書」によれば、「御除地高二石、凡建坪六拾五坪右は往還より南の方四拾二間程入り、往還差支の節は御休泊相勤め申し候」とあり、金谷宿唯一の日蓮宗寺院でした。

[芭蕉の句碑]

「道のべの 木樅は馬に 食はれけり」

本堂の東側の一角に「芭蕉の句碑」があります。

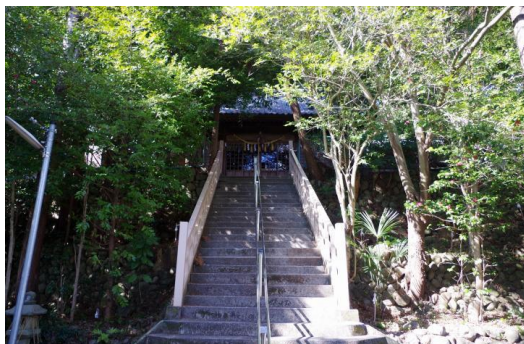


この句は、貞享元(1684)年8月、門人の千里を同伴して東海道を旅し、大井川を越した当地方で詠んだ句と考えられる。「野ざらし紀行」(甲子吟行)に記されている。

⑨巖室神社

(⑧から徒歩5分)

地域の人々に「姫宮さん」と呼ばれ親しまれる神社



社伝によれば、正治2(1200)年頃、当時の住家三戸の氏神として、現在地の巖室を開いて三柱である瓊々杵尊(ににぎのみこと)、木花之開耶姫(このはなのさくやひめ)、金山彦命(かなやまひこのみこと)の神を勧請奉斎し、巖室神社と称すと記しています。町名金谷のこの金山彦の神名から、由来したとの説もあります。

その後、神社名は、「若一王子社」、「姫宮」から「巖室神社」に変更されましたが、氏子たちは今でも「姫宮さん」と親しみをこめて呼んでいます。

「巖室神社鎮火祭」(神事十月二十八日午後七時より)

享保年間から元文年間(1716~1740)にかけて、金谷宿内で大火が相次いだことから、当時の神官が、迦具土神(かぐつちのかみ)の怒りを鎮めようとしたことからはじめられたと伝えられています。

鎮火祭は、氏子が参集するなか、庭場に祭場を設けて五菜(人参、大根、里芋、ゴボウ、果物)の神饌を供し、水神、ひさご、埴山姫(土)、川菜の四種を供えて儀式を執り行います。

この儀式は宮廷祭祀の一つである、「令義解(りょうぎかい)」における火災を防ぐための祭儀に由来するとされており延喜式(えんぎしき)の神祇に則った巖かなものです。

祭事は、神官が太刀をもって予め設けた焚火を切り、ひさごに盛った水をかけ、埴山姫と川菜によって火を鎮めます。この神事で出た鎮火のは炭は、火災除けのお守りとして祭事の参列者に配られます。

巖室神社鎮火祭は、平成2年7月9日島田市無形民俗文化財に指定されています。

「巖室神社六月(みなつき)大はらい」(神事六月三十日)

古来より、六月(みなつき)はらいとして、カヤで作られた直径2メートル位の【茅(ち)の輪】をくぐり、疫病や今までの知らず知らずのうちに重ねた罪や心身のけがれをはらい、後の半年の無病息災を願う神事として午後七時から式典が行われています。